

# 中学校社会科教員の授業力向上に関する一考察

－ 自主研究団体での研究を通して －

谷本 里都子

(学校教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

## One Consideration about the Lesson Power Improvement of the Junior High School Social-studies Teacher: Let Research by an Independence Research Body Pass

Ritsuko Tanimoto

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要旨** 教員には授業力の向上が常に求められている。今後増加していく若年教員の育成は学校現場において重要な課題となっている。若年教員の授業力向上という点において、個人研修や校内研修だけでは十分ではない。香川県には勤勉な教員文化があり、教科ごとの自主研究団体の研究には長い歴史があり、大きな成果を上げてきた。今後、若年教員の増加により自主研究団体が果たす役割は今まで以上に大きくなってくると考えられる。

**キーワード** 授業力の向上 自主研究団体 若年教員の育成 教員の研修システム 教員文化

### I 授業力と多様な研修システム

香川県では今後数年間で約40%の教員が退職し、若年教員が増加することで教育力の低下が懸念され、学校現場でも若年教員の育成が喫緊の課題となっている。若年教員のみならず、教員の資質能力の向上については以前から言われてきた。「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」<sup>1)</sup>では、教員として必要な資質能力を、①教職に対する強い情熱 ②専門家としての確かな力量 ③総合的な人間力 の3つに分類している。特に、中学校教員においては②の要素が重要になってくる。②の専門家としての確かな力量をここでは、授業力と考えたい。

筆者は香川大学と香川県教育委員会との人事

交流協定により、平成25年4月から香川大学教育学部で勤務している。昨年度まで中学校の社会科教員として、25年間勤務してきた。中学生に対して、常日頃から繰り返し伝えてきた言葉は、「授業が命」である。学校生活の中で授業の時間が一番長く、生徒にとっては一生に一度限りの授業である。だから、一時間一時間を真剣に受けてほしいという願いを込めて生徒に繰り返し指導してきた。授業をする教員の立場から言うと「授業で勝負」なのである。中学校では授業の中で生徒指導を行うという側面もある。教科担任制の中学校だからこそ、教科担任が責任をもって授業を成立させ、生徒にその教科の楽しさを味わわせたり、その教科に必要な技能や能力を身に付けさせたりすることが求め

られている。

現在は大学教員という今までとは異なった立場から香川県の教育に携わっている。今回の異動をきっかけに中学校社会科教員としての自分を振り返ってみたい。

まずは、教育実習である。筆者自身も香川大学教育学部の中学校教員養成課程だったので、大学4年生の時に附属高松中学校で6週間教育実習（当時は主免も副免も4年生で教育実習を実施）を行った。その際、附属高松中学校の2名の教員のご指導のもと学習指導案を作成し、授業実践を行った。当時、①学習課題の把握 ②予想 ③検証 ④まとめ という四段階の学習過程を入れた学習指導案を作成していた。当時は二層四段階という学習過程<sup>2)</sup>のことや意味も知らずに学習指導案を作成していた。

その後、大学を卒業して、新規採用教員として、坂出市内の中学校に赴任した。校内での新規採用教員への指導体制としては、主に2名（1名は社会科教員、1名は他教科教員）の教員による指導であった。社会科教員には、日々の授業に関すること、評価に関すること等で指導を受け、もう1名の他教科教員からは生徒とのかかわり等、生徒指導に関する事で指導を受ける。また、校内の教科部会（社会科部会）でも学習指導案の検討をするなど、教科指導に関する指導を受けてきた。学年団では学年主任を中心とした指導体制が構築され、日常的な指導が受けられた。

校外では、坂出市中学校教育研究会社会科部会（坂出市内の中学校に勤務する社会科教員の自主研究団体、以下は略して坂中社と表記する。現在は、坂出・綾歌地区中学校教育研究会社会科部会、以下は略して坂綾中社と表記する）があり、研究授業や授業討議、提案事項をもとにした研究協議により、授業力を向上させたり、研究を推進したりする。夏季休業中には香川県中学校社会科研究会（以下は略して、香中社と表記する）が主催する夏季研修会に参加し、香中社が昭和43年に提案した二層四段階の学習指導過程の存在を知った。

何年か教員をしているうちに、図のような社

会科教員の授業力向上のための研修システムが見えてきた。

授業力という観点から筆者の25年間を振り返ってみると授業力向上の契機となる要因は2つある。1つは、自分が研究授業を実践し、授業力を磨いていくことである。もう1つは、香中社の研究部員として研究に携わることである。

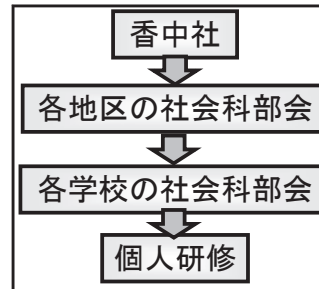


図1：授業力向上のための研修システム

個人研修や校内の社会科部会で授業力を向上させることが理想的である。しかし、近年、校内の社会科部会の人数も減少し、小規模校であれば、社会科教員が1名しかいないため、校内の社会科部会による授業力の向上は期待しにくい状況である。今後、若年教員が増加していくことを踏まえても、各地区の社会科部会や香中社のような自主研究団体が若年教員の指導力向上において果たす役割が大きくなっていくのではないかと考えた。また、同年代の教員が多いため、今までよりも自主研究団体参加への敷居が低くなり、若年教員の参加率の向上も期待でき、自主研究団体の活性化にもつながる。

## II 香中社の歴史と筆者とのかかわり

筆者が香中社と特に大きくかかわったのは2つの時期である。1つ目は、平成17年度の香川県中学校教育研究会社会科部会研究大会（略して、香中社研、以下は香中社研と表記する）の仲善大会に向けてである。平成16・17年度に香中社歴史部会の研究員として、香中社の研究部だけでなく仲善の社会科部会の勉強会にも参加

し、研究にかかわってきた。その際に次の香中社坂出大会に向けての研究の系統性・継続性を意識しての研究でもあった。

2つ目は、平成20年度の第37回四国社会科教育研究会香川大会（坂出大会）に向けてである。平成19・20年度に香中社歴史部会の研究員として、また歴史的分野の分野提案者として、香中社の研究部だけでなく坂出・綾歌地区の社会科部会の勉強会である木曜会にも参加し、研究を推進してきた。それまでの自分の研究・実践を

振り返ると経験則からの実践であったが、この時の研究は、理論と実践の両輪による研究推進であることがそれまでと大きく異なる点である。この研究の際、坂中社は、岩田(2001)<sup>3)</sup>の理論をもとに実践につないでいこうとした。岩田氏には香中社や坂中社にも来て頂き、講演や指導をして頂いた。

香中社の歴史を日本の社会科教育等との関連において、以下の表にまとめてみる。

	香中社の歩み	社会科教育・教育一般の動向	筆者の歩み
昭和26年	香中社の発足		
昭和31年		『中学校学習指導要領社会科編』発行	
昭和43年	全中社研（香川大会） 香中社が「二層四段階」学習指導過程を提案	教課審「中学校の教育課程の改善について」を答申	
昭和52年		『小・中学校学習指導要領』告示	
昭和59年	全中社研（坂出大会） 共感的理解を3つの側面からとらえ、それを高める教材構成や指導方法について発表		
昭和63年	その後、香中社では、「共感」をキーワードに研究推進		新規採用
平成元年		『小・中・高等学校学習指導要領社会科編』告示	坂中社提案（H元） 三観大会の協力者、坂中社研究授業（H2） 公民編集委員（H3） 歴史編集委員（H4） 歴史編集委員（H13）
平成8年	香中社研（綾歌大会） 二層五段階の学習指導過程（二層四段階の学習指導過程の中に「意思決定の場」を設けたもの）を提案		地理研究委員、坂中社提案（H14） 歴史研究委員（H16、17）
平成10年		『中学校学習指導要領社会科編』告示	歴史的分野授業協力者（H17） 歴史研究委員（H19、20） 歴史的分野提案（H20） 公民編集委員（H23）
平成11年	全中社香川大会（高松大会） 投影型学習指導過程 <sup>4)</sup> （概念探究過程と意思決定過程から成る）を提案		
平成14年	香中社研（大川大会）	完全学校週5日制	
平成17年	香中社研（仲善大会） ・問題発見力を養うために社会との対話の場、問題発見の場という2つの場を提案 ・それをつなぐものとして概念探究過程があると位置付け		
平成18年		改正教育基本法公布・施行	
平成19年		全国学力・学習状況調査実施開始	
平成20年	四国社会科教育研究会（香川大会）（坂出大会） ・問題解決力 <sup>5)</sup> を養うために合理的な意思決定過程にいたる授業を提案 ・問題発見の場を概念探究過程とのつなぎとしての授業を効果的に組み込んだ学習指導過程を提案	文科省『中学校学習指導要領社会科編』告示 改正教育3法施行	
平成24年	全中社研（香川大会）（高松大会） ・授業力向上という視点からの研究 ・これまでの香中社の研究成果を見つめ直しながら、次代の担い手の育成	中学校学習指導要領（文科省）の完全実施、新しい教科書	

香中社の歴史を振り返ってみると、平成24年の全中社研香川大会では研究の視点を生徒の姿から教員の授業力へと大きく転換していることがわかる。この大会の研究主題「未来社会につなぐ社会認識の構築～授業力の継承、そして創造～」からも若年教員の授業力向上という香川県の喫緊の教育課題が見てとれる。

### Ⅲ 四国社会科教育研究会香川大会（坂出大会）での歴史的分野の提案

平成17年の香中社研仲善大会と平成24年11月の全中社研香川大会（高松大会）をつなぐ平成20年11月の四国社会科教育研究会香川大会（坂出大会）について、筆者が行った歴史的分野の提案を中心に振り返り、坂出大会の意味付けをしたい。

#### 歴史的分野提案

未来とともに拓く生き方を追求する生徒の育成を目指した社会科授業のあり方  
－問題発見力から問題解決力へ－

#### 1 歴史的分野の問題解決力とは

生徒が実際に生活している社会においては、議論が分かれ価値判断に迷うことも多い。生徒は将来このような社会に出て行くことになり、そのときには、様々な社会的事象に対して、自分の判断をしたり、自分の行動を決めたりしなければならない状況になる。このような状況のなかで、社会的認識に基づいた主体的な判断ができる生徒を育成することが求められている。そのためにも生徒が自分の価値判断を行うような社会科授業を展開し、社会的事象に対して、それまでの学習成果を生かした価値判断を行い、その根拠を説明することができるような問題解決力を身に付けさせることが重要である。

歴史を学ぶことは、社会が変化することを前提としており、社会の変化そのものを学習材としている。そこで、それまでの学習成果を生かし、自分の立場を明確にしながらか「その当時は、

どんな時代だったのか」を考えて、価値判断させることが歴史的分野の問題解決力と考える。このような学習過程を繰り返すことによって、歴史の大きな流れを理解し、社会の変化に対応する力が育つのではないかと考えた。

生徒は、歴史的な事象をさまざまな角度から多角的に見ることで、その事象がもつ多面性をとらえることができる。多角のとらえ方は様々であるが、本研究では、歴史的な分野における「多角」は立場を表すことに焦点化して考える。例えば、幕末という1つの歴史的な事象では幕府の立場から、朝廷の立場から、町人の立場から、雄藩の立場からなど、いろいろな立場に寄り添う。このように生徒は、いろいろな立場に立って、幕末という歴史的な事象を考察していくことで幕府権力の衰退や朝廷政治への期待などという政治的な面、百姓一揆や打ちこわしの増加などの社会的な面、欧米列強のアジア侵略や不平等条約などの外交的な面など、いろいろな面が見えてくる。つまり、その時代の特色が見えるいろいろな面を「多面」ととらえることができる。また、いろいろな面から歴史的な事象を多角的に考察することによって、その時代の特色が明確になり、歴史的な事象をよりよく理解することもできる。一方、教師は、その時代の特色を考えさせるような「多面」をもつ歴史的な事象を題材として、生徒にいろいろな立場に立たせるような（多角的な）授業を設計していくことで、社会的認識に基づいた主体的な判断ができる生徒を育成することができる。（多面・多角の考え方<sup>6)</sup>）

#### 2 社会科の問題<sup>7)</sup>とは（歴史的な分野）

歴史的な分野における社会科の問題とは、支配層の交代、変化の時、時代の転換期にあたる題材のところで問題が成立しやすいと考える。そのような題材では、立場が見えやすく、対立関係もある。つまり、それまでに学習した時代と比較しながら、その時代の特色を問う問題、当時の人々の判断を問う問題、外国との比較や関連を問う問題などが考えられる。現行学習指導要領には「学習した内容を活用して、その時代



を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえる」という記載が追加された。

歴史では、既に結論が出ている歴史的事象に関する価値判断を求めるが、結論が出ているからこそ、そのことにはどのような意味があったのかを確認させることで、歴史的事象が現在に結び付いていることを認識することができ、ここに歴史を学ぶ意義があると考えられる。

具体的には、「あなたが聖徳太子だったら、中国にどんな手紙を出すか」「どこに幕府を開くか」「承久の乱の際、朝廷方と幕府方のどちらに味方するか」「建武の新政の際、どうすれば成功したのか」「あなたが室町時代の農民だったら、この時代をどのようにして生き延びるか」「戦国時代の武将のうち、だれが天下取りに一番近いか」「あなたが幕府のリーダーだったらペリーにどんな返事をするか」「不平等条約を結んだ井伊直弼の人物評価」「大政奉還か討幕か」「明治の諸改革で日本は近代化したのか」「大日本帝国憲法の意義を問う」「あなたが明治政府のリーダーならば、どんな憲法をつくるか」「日本が日露戦争をしなかったら、その

後の日本はどうなっていたか」などがあげられる。

### 3 歴史的分野における意思決定

歴史では、既に結論が出ている歴史的事象に関して、その時代における、よりよい解決方法を考えることで自分の意思決定を行う。つまり、その当時の人たちの立場に立って、当時の時代背景を探っていく。そのなかで、その当時の人たちは、このような選択をしたけれど、別の選択もあり得たのではないかを考えていく。このような考え方をすれば、よりよい未来が作れることを知り、これが歴史から学ぶということである。つまり、単元の途中や最後に意思決定過程の授業を設定することで、それまで学習した概念探究過程の学習内容がよりよくわかるようになり、自分の考えを文章で表すことで、言語活動の充実にもつながる。

#### (1) 歴史的分野の問題解決力を育成する授業の構成

##### ① 単元 「欧米の進出と日本の開国」

#### ② 学習指導計画

次	小 単 元	面 (キーワード)	角 (立場)	配当時間	学習指導過程
1	近代革命の時代	近代革命による市民の台頭	欧米諸国 (イギリス・アメリカ・フランス)	1	概念探究過程
2	産業革命と欧米諸国	資本主義経済の発達	欧米諸国 (イギリス・ドイツ・アメリカ)	1	
3	ヨーロッパのアジア侵略	欧米列強のアジア侵略	欧米列強 (イギリス) アジア諸国 (清・インド)	1	
4	開国と不平等条約	開国, 不平等条約 幕府権力の衰退 貿易による混乱	幕府 (将軍) 朝廷 (天皇) 大名, 民衆, アメリカ	1	
5	江戸幕府の滅亡	朝廷政治への期待 武士政治の終わり 雄藩の台頭	幕府 (将軍) 朝廷 (天皇) 雄藩 (薩長) イギリス・フランス, 民衆	1	
<p>概念探究過程を終えて、「大政奉還は必要だったのか?」という疑問が生徒から出された。 討幕派と大政奉還派、両方の立場の考え方を確認し、生徒が判断しやすくなるような以下の6次の授業を行い、意思決定過程につなげていく。また、歴史的分野では概念探究過程で出てきたキーワードに沿って学習内容を確認していくのも効果的である。</p>					
6	坂本龍馬と西郷隆盛の考えを調べよう	朝廷政治への期待 幕府権力の衰退 欧米列強のアジア侵略	徳川慶喜・坂本龍馬 (大政奉還派) 西郷隆盛 (討幕派)	1	生徒の疑問から意思決定過程の学習課題へ

7	政治を立て直すには大政奉還か討幕か	上記すべて	上記すべて 坂本龍馬と西郷隆盛を核として	1	意思決定過程
---	-------------------	-------	-------------------------	---	--------

7時間目を詳しく表すと以下ようになる。

意思決定過程の段階	具 体 例	学習展開パターン
新たな課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幕末までの学習（概念探究過程）を終えて、疑問や問題を発見できるような授業を設定する。</li> <li>○「大政奉還は必要だったのか」という生徒の疑問から本時の学習課題を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1つの単元の歴史学習を終えて、おおまかな時代の流れや特色をつかむ。</li> <li>・既習の他の時代や今の時代と比較することによって、疑問や問題を発見する。</li> </ul>
	政治を立て直すためには、大政奉還か討幕か	
仮の意思決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幕府の立場、朝廷の立場、雄藩の立場、町人の立場から考え、自分の考えを名前プレートで示す。自分の考えを心情円盤で示す。</li> <li>○自分の考えと根拠を4人グループで発表する。自分とは異なる友だちの考えをメモする。</li> </ul>	幕末という1つの歴史的事象でも以下の3つのパターンが考えられる。 <b>【Aパターン】</b> （二者択一） 大政奉還か討幕か <b>【Bパターン】</b> （自分が…だったら） 自分が徳川慶喜ならば、将軍としてどうしたか？ <b>【Cパターン】</b> （歴史的事象の意義） 開国の意義を問う
価値の分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>○クラス全体で自分の考えを発表する。</li> <li>○ロールプレイを見て、最初とは異なる別の立場に立ってみて、自分の考えを深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロールプレイを行ったり、友だちの考えを聞いたりして、自分とは異なる立場になって考える。</li> <li>・自分とは異なる立場の資料から自分の考えを深めたり、修正したりする。</li> </ul>
意思決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総合的に考えてみて、自分の判断と根拠をワークシートに記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・○○の立場から考えると…、△△の立場から考えると～、そして総合的に考えると（よりよい時代をつくるためには）□□であると考え。その根拠を資料に基づいて、説明することができる。</li> </ul>

### 【授業パターンについて】

学習課題の入口としては、A・B・Cの3つのパターンに分類できるが、問題解決の出口としては、すべてCパターンに集約できる。どのパターンで授業を行っても、最終的には、その

歴史的事象の意義を問うことになり、これが歴史を学ぶ意義になる。

### (2) 3つのパターン別により分類した歴史的分野における社会科の問題

Aパターン （二者択一）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・承久の乱の際、朝廷方と幕府方のどちらに味方するか</li> <li>・開国か鎖国を続けるか</li> <li>・大政奉還か討幕か</li> </ul>
Bパターン （自分が…だったら）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたが聖徳太子だったら、中国にどんな手紙を出すか</li> <li>・どこに幕府を開くか</li> <li>・建武の新政の際、どうすれば成功したのか</li> <li>・あなたが室町時代の農民だったら、この時代をどのようにして生き延びるか</li> <li>・あなたが幕府のリーダーだったらペリーにどんな返事をするか</li> <li>・あなたが明治政府のリーダーならば、どんな憲法をつくるか</li> </ul>
Cパターン （歴史的事象の意義）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戦国時代の武将のうち、だれが天下取りに一番近いのか</li> <li>・不平等条約を結んだ井伊直弼の人物評価</li> <li>・明治の諸改革で日本は近代化したのか</li> <li>・大日本帝国憲法の意義を問う</li> <li>・日本が日露戦争をしなかったら、その後の日本はどうなっていたか</li> <li>・原爆投下は避けられなかったのか</li> <li>・日米安全保障条約を改定すべきだったか</li> </ul>

(3) 概念探究過程と意思決定過程のつながりを示す学習指導案の書き方

面（キーワード）と角（立場）を表形式でまとめる学習指導計画を提案する。その単元での面と角を以下のような表形式で記述すること

で、単元全体の授業設計がわかりやすくなる。

また、右端に学習指導過程を記述することで、概念探究過程と意思決定過程とのつながりがよくわかる。以下に面と角を表形式でまとめる学習指導計画の例を挙げる。

【東アジア世界とのかかわりと社会の変動の学習指導案（学習指導計画）から】

次	小 単 元	面（キーワード）	角（立場）	配当時間	学習指導過程
1	モンゴルの襲来と日本	外交・幕府の滅亡	幕府・御家人	1	概念探究過程
2	建武の新政と南北朝の動乱	戦乱・権力交代	朝廷・御家人・幕府	1	
3	東アジアの変動	貿易・東アジア	幕府	1	
4	室町時代と経済の発展	自由・成長	農民・商工業者	1	
5	民衆の成長	団結・一揆	農民	1	
6	応仁の乱と戦国大名の登場	下剋上・戦乱	戦国大名	1	
7	室町時代とはどのような時代だったのか	(上記すべて)	農民	1 (本時)	意思決定過程
8	室町文化とその広がり	今に続く文化	武士・公家・庶民	1	概念探究過程

(4) 感想や疑問を書かせることに対する生徒の反応

坂出・綾歌の中学生1459人（平成19年度に調査したもの）のうち、約70%の生徒が感想や疑問を書くことに対して肯定的に回答した。また、約30%の生徒が「めんどくさい」「何も思わない」など否定的に回答した。それぞれのおもな理由は、以下の通りである。

【肯定的にとらえている理由】

- ・自分もっている疑問を確認できる。
- ・自分の考えを書いて残しておけるし、後で読み返せる。
- ・授業でやったことをもっと深く考えることができる。
- ・自分の意見をまとめることができる。
- ・後で見直したときに自分の感想がわかって内容が深められるし、自分の理解度がわかっていい。

【否定的にとらえている理由】

- …否定的だが、肯定的な意見
- ・あまり書くことが思いつかない。
- ・めんどくさい。

- もっと書く時間を確保してほしい。
- 毎時間書くのは、きつい。

《データからの考察》

授業の終末に、まずは、第1段階として授業の感想を記入させた。初めの方は何を書いたらよいかわからず、とまどう生徒も多かったが、だんだんと感想を書くことに慣れてきた。また、感想を書く際の着眼点がよくなってきたり、感想だけではなく疑問を書いたりする生徒も増えてきた。

次に、第2段階として授業の感想の要求レベルを上げてみた。例えば、授業で学習した内容と今までに学習してきたこととを比較して、現在の社会のしくみと比較して、もし、その歴史的現象が起こっていなかったら、その後の世の中はどうなっていたのだろうかなど、生徒が書きやすいようにヒントを与えた。すると生徒は、今までよりもレベルの高い授業の感想や疑問を書くように変容しつつある。

授業の感想や疑問を書くことに関しては、おおむね肯定的にとらえている生徒が多い。しかしながら、めんどくさい、別に何も思わないと

否定的に回答した生徒が約30%いる。その中で注目すべきは、「もっと書く時間を確保してほしい」「毎時間書くのは、きつい」という回答である。今までは、毎時間、授業の終末に感想や疑問を書かせていたが、どの授業の際に感想や疑問を書かせたら、より有効であるかを考えたり、書かせる場面を精選したりすることで、感想や疑問を書く時間をもっと確保できるのではないかと考えた。

そこで、アンケートでの生徒の意見を取り入れ、第3段階として、5～6時間のスパンで感想や疑問を書かせるようにした。すると生徒は今までに学習したこととつなげたり、比較したり、関連させたり、焦点化したりしながら感想や疑問を書くように変容してきている。また、5～6時間のスパンで感想や疑問を書かせることで生徒が最も興味をもった内容を教師が把握することもできるという利点もある。この第3段階で出てきた生徒の疑問を教師がうまく加工して、意思決定過程の学習課題につなげていくことが必要になってくる。

また、生徒に感想や疑問を書かせることで教師も新たな発見があった。生徒が書く感想や疑問の文章の長さは、授業への興味・関心、授業への取り組み方と相関関係があること、楽しく、興味をもった授業や葛藤が生じたとき、自分の疑問や学習課題に対しての答が得られたときなども文章が長くなることである。そこで、授業の終末で感想や疑問を書くことの意義を十分に生徒に伝え、生徒が納得した上でこの活動を継続していくことで問題発見力やひいては問題解決力の育成につながるのではないかと考える。

#### 【感想や疑問を書かせることの意義】

- ・歴史的事象に対する生徒一人一人の考え方、感じ方を教師が把握することができる。(教師サイド)
- ・生徒の考えを集約することで考えが対立する生徒の把握をしたり、新たな考えをもつ生徒に意図的指名を行ったりして、次の授業の学習課題を設定することができる。(教師サイド)

- ・自分の考えを継続、累積して文章表現することで、自分の考えを振り返ったり、自分の考えの変容をみとったりすることが可能になる。(生徒サイド)
- ・授業中あまり発言できない生徒でも感想や疑問を書くことで授業にかかわり、自分の考えを表明する場を保障することができる。(生徒サイド、教師サイド)

### (5) 生徒が書いた感想や疑問

#### 【第1段階】

- ・井伊直弼はハリスの要求を仕方なく受け入れ、条約を結んだけれど、私はその時代の人だったら、井伊直弼を責めないと思う。外国を敵にまわすとどうなるかは、当時だれだって知っていたと思うし、日本の国自体を失わないためにも条約を結んだからといって悪いわけではないと思う。

《自分がその当時に生きていたら…の視点》

- ・当時は産業革命が重要で、アジアはとても不利な状況にあったけれど、どうして遅れたのかぐわしく知りたいと思った。もし日本が産業革命をしていたら、外国に立ち向かおうとしたのだろうか。

《もし～だったら…だろうかの視点》

#### 【第2段階】 網掛け部分は第2段階で新たに出てきた視点

- ・自由民権運動があったから、今の日本があるのだろうと思った。明治政府は日本をよくするという意味がわかってなかったように思う。強い国がよいのではなくて、国民がみんな自由に生活できることが一番なのだということに早く気づいていれば、一揆などが起こらずに、まとまった強い国になっていたのではないだろうか。

《現在とのつながりの視点》

- ・ポーツマス条約の仲立ちをしたアメリカは、よく考えていると思う。これからもアメリカは、いい立場になっていくのではないだろうか。

《学習したことを踏まえての今後の予想》

#### 【第3段階】 網掛け部分は第3段階で新たに出てきた視点



- ・ビデオの沖縄の戦いで驚くことがあった。地理で習った「さとうきび畑の唄」の歌詞に出てくる鉄の雨をカラーフィルムで見た。尋常でないくらいに爆弾が落ちてきて、すごかった。戦争は経験したことがないので、よくわからないが残酷さは、よくわかった。

#### 《地理的分野の学習との関連の視点》

- ・長々と続く戦争の中で心に残るところは太平洋戦争からの日本のひどさである。真珠湾攻撃や原爆など、どうしてそこまでするのだろうと私は思ったが、当時の人々にしてみれば、それが普通で、ただ耐えるしかなかったのだろうかと思うとつらくなった。日本は、ひどいことをしたり、ひどいことをされたりと戦争をしたことで何を得たのだろうかと思う。政府は国民のことは全く考えてなかったのだろうか。どんな欲望で戦争を続けていたのかは理解できないし、理解したくもないが、戦争で得られるのは苦しみだけだと思った。

#### 《よりよい未来をつくるという視点》

以上のように問題発見力や問題解決力を育成するために感想や疑問を終末で書かせる活動を第1段階から第3段階まで実施してきた。授業する単元や生徒の実態に応じて、どの段階で感想や疑問を書かせた方が生徒の疑問を学習課題として取り上げ、価値判断をせまる授業が構築できるのかを考える必要がある。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

#### ① 問題発見力について

前回の大会では、1時間ごとに疑問や感想を書かせることで問題発見力を養ってきた。今回は、どの授業の際に感想や疑問を書かせたら、より有効であるかを考えたり、書かせる場面を精選したりすることで生徒は今までに学習したこととつなげたり、比較したり、関連させたり、焦点化したりしながら感想や

疑問を書くように変容してきている。

新しい視点で感想や疑問を書いたものを次の時間に紹介したり、解決できる疑問に関しては次の時間に解決したりしている。出てきた生徒の疑問を教師がうまく加工して、意思決定過程の学習課題につなげていくことで、問題発見力やひいては問題解決力の育成につながっていく。

#### ② 問題解決力について

概念探究過程の途中や単元の終わりに意思決定過程の授業を設定することで、少しずつではあるが問題解決力を身に付けさせることができつつある。つまり、当時の時代背景を知った上で、歴史的事象に関して多面・多角から考察することで、資料に基づいて自分なりの価値判断をし、その根拠を説明することができるようになってきている。歴史的分野では、結論が出ているからこそ、そのことにはどのような意味があったのかを確認させることで、歴史的事象が現在に結び付いていることを認識することができるようになってきた。また、意思決定過程の授業をすることで概念探究過程で習得した学習内容がよりよくわかることが実証でき、知識の活用型の授業が少しずつ展開できるようになってきた。

### (2) 課題

#### ① 公民へのつなぎについて

歴史的分野における社会科の問題は、既に結論が出ている歴史的事象に関する価値判断を求める。当時の時代背景を知って、その当時であれば、そうせざるを得なかったけれど、多面的・多角的に考察した結果、歴史的事象が現在に結び付いていることを認識することができた。また、歴史から学ぶことで、よりよい未来社会を作っていくための参画意識も高まるのではないか。つまり、歴史的分野で身に付けた未来予測の力をいかに公的的分野の学習につなげていくかが課題である。

#### ② 授業時数の確保について

概念探究過程の後に意思決定過程の授業を設定するための時間的な確保も課題である。

旧学習指導要領のもとでは、地理的分野の授業時数とのかねあいや歴史的分野における単元の再構成をするなどの工夫が必要であった。しかし、現行学習指導要領では授業時数が増加したため、意思決定過程の授業が展開しやすく、現行学習指導要領でも強調されている言語活動の充実につながると考える。

#### IV 坂出大会を振り返っての教員の変容

筆者が若年であった坂出大会以前の頃は、校内の社会科部会で学習指導案を検討したり、模擬授業をしたり等を経て、校内や坂出市内の社会科部会で研究授業を行い、授業力の向上に努めてきた。校内の教科部会で事前の学習指導案を検討することで多くの助言をいただき、授業実践に大いに役立った。このことから授業力の向上において、校内の教科部会が果たす役割は大きかった。

その後、筆者が中堅教員に属する頃には、香川県内で中学校の社会科教員として新規採用されるのは県下で1人という状況が数年間続いた。そして、生徒数の減少に伴い、教員数も減少し、校内の教科部会の人数も減少、徐々に校内の教科部会が果たす役割が低下していった。

校内での教科部会に代わって、役割を増したのが坂綾中社である。複数校の社会科教員が集まって、研究授業の学習指導案を検討したり、情報交換をしたりして授業力向上のために努力してきた。

平成17年の香中社研仲善大会に向けて、平成16・17年の2年間にわたり、坂出市の社会科教員が3名（3分野から1名ずつ）仲善の勉強会にも参加した。他郡市の社会科教員と研究推進や授業づくりについて協議する貴重な時間でもあり、特に、教材開発や授業設計において研究を深めることができた。

坂出大会に向けての研究を通して、自分の授業力を向上させることができたことが最大の収穫である。授業力の中でも特に、単元構成力を身に付けることができた。学習指導要領を細かく読み、特に、歴史的分野においては、学習内

容の構造化と焦点化を意識することで各単元における基礎・基本が明確になった。また、新しい学習指導要領で追加・変更があった箇所を意識して日々の授業づくりができるようになった。このことが教員の授業改善にもつながり、社会科に対する興味・関心をもち、多面的・多角的な考察ができる生徒の増加にもつながっていくと考える。坂出大会が終了してからも授業導入部分での3問テスト（社会との対話の場）は継続しており、新聞やニュース等の時事問題に興味・関心をもつ生徒は増加している。3問テストで扱う時事問題を生徒にわかりやすく解説することで、本時の授業内容につながっていったり、社会的事象に関する生徒の疑問に答えることにつながったりする等、授業に広がりが見られるようになったことも成果の1つである。

坂出大会に向けての研究において意識した点は地理的分野、歴史的分野、公民的分野の相互の関連である。筆者は歴史的分野の提案者であったが、他の2つの分野との関連や小学校の歴史学習との関連も留意しながら研究を推進してきた。その中で、他分野との関連を意識しての教材解釈、単元構成ができるようになった。

また、坂綾中社や香中社の研究部において、ともに研究したり、授業をつくり上げたりするなかまの教員の存在が研究推進の原動力であった。坂綾中社や香中社には筆者と同じ年代の教員もいるし、先輩も後輩もおり、さまざまな年代の教員で構成されている。授業力向上という観点において、自分と同じ年代の教員には相談しやすく、お互いを高め合えるというメリットがある。また、先輩教員からは今までの研究成果を教えていただいたり、助言をしていただいたりすることで授業力が向上する。そして、これからの時代に忘れてはならないのが若年教員の存在である。中堅教員やベテラン教員が若年教員に実践的な授業技術や教材解釈等を指導することで若年教員の授業力が向上するだけでなく、今までの研究成果や授業技術が継承されていく。

## V 終わりに

志水 (2012)<sup>8)</sup> は次のように述べている。

「香川県の学力の高さを支えるものとして、教科別の自主研修会の充実があげられる。昭和20年代から始まり、研修会の参加率も極めて高い。自主研修会の意義を強調する意見も多い。土曜日に定期的に開催され、休みにもかかわらず、参加する教師も多い。この参加率の高さは県が地理的にコンパクトであることも有利に働いている。市町ごとに、教科別研究会の下部組織が存在するが、県全体で研究を進める体制がとりやすく、それが香川県の教科別研修会の水準を高いものにしていく。香川県の教科別研究会が活性化しているのは、この会が教師の専門性向上に重要であるという認識が教師の間で共有されているからである。学校での校内研修とともに、全県的な自主研修会でさらに授業力を向上するシステムが、香川県の学力の高さにつながっているという認識は強い。」

つまり、教員相互の学び合いの場を提供し、学び合いの文化を継続していくことを通して若年教員の育成も図ることが香中社等の自主研究団体が果たすべき役割ではないかと考える。筆者も自主研究団体に参加することで先輩教員からの指導を受け、授業力を向上させてきた。今後も自主研究団体が果たすべき役割は大きいと考えるが、課題もある。大学生の時から香中社等の自主研究団体の存在や活動状況を知っておくことがこの課題を解決する一つの方策にもなると考える。また、若年教員が増加している現在、高松塾、坂出の木曜会等、若年教員の学ぶ場もできつつあるのは明るい展望でもある。

### 【註】

- 1) 平成17 (2005) 年10月26日、中央教育審議会が出した答申
- 2) 昭和43年に香川県で行われた全中社研において、香中社が提案したもの。学習者である生徒の認識を視像的認識という浅い層から映像的認識へと深

めようとするもの。社会的現象をまとまりのない形で把握する一面的理解の認識 (つまり、事実認識) から、客観的な論理的思考により、ある現象を核として構造的に位置づけられた認識 (つまり、関係認識) へと深められる過程

- 3) 岩田一彦 (2001) 『社会科固有の授業理論 30の提言』 (明治図書)

- 4) 視像的認識から映像的認識に深まる概念探究過程と映像的認識から投影的認識へと深まり、社会に投影された認識になる意思決定過程から成るもの

- 5) 自ら社会的現象について、多面的・多角的に分析し、確かな事実認識をし、自己の立場を明確にし、ながら価値判断する力

- 6) 平成20年

11月の四国社会科教育研究会香川大会 (坂出大会) において、筆者



が行った歴史的分野提案のプレゼンテーション画面より

- 7) ○生活や社会に関わったり、生徒の関心が高かったりと、みんなで追究する価値のあるもの

○多面的・多角的な見方や考え方を養うことができるもの

○概念探究過程の学習で培った事実認識を基盤として解決できる問題であり、またその問題を解決することにより、その前提である概念探究過程での学習がより明確になるもの

以上の条件を満たす問題

- 8) 志水宏吉・高田一宏編著 (2012) 『学力政策の比較社会学 国内編 全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』 (明石書店)

### 【参考文献】

- 香川県中学校社会科研究会 (2012) 『第45回全国中学校社会科教育研究大会 香川大会要項』
- 香川県中学校社会科研究会 (2012) 『社会科授業力ハンドブック』
- 香川県中学校教育研究会社会科部会 (1991) 『香中社

のあゆみ 社会科研究Ⅰ』

香川県中学校教育研究会社会科部会（2000）『香中社

のあゆみ 社会科研究Ⅱ』

香川県中学校社会科研究会（1999）『第32回全国中学校社会科教育研究大会 香川大会要項』

香川県中学校社会科研究会（2008）『第37回四国社会科教育研究大会（香川大会）中学校の部大会要項』

日本社会科教育学会（2012）『新版 社会科教育事典』  
ぎょうせい